

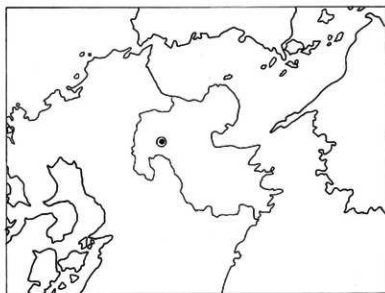
瀧ノ原遺跡

一般国道210号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

大分県教育委員会

瀧ノ原遺跡



序 文

瀧ノ原遺跡のある玖珠町は、九州山地に源を発し、有明海に注ぐ筑後川上流域の盆地を中心に開けた町であります。大分県の中でも、ほぼ中央部に位置し、町内を大分市と福岡県久留米市を結ぶ国道210号が通り、近年では、九州横断高速道も開通しております。このように、玖珠町は、北部九州と大分を結ぶ交通の要衝となる地域であり、それは古代においても同様でありました。

瀧ノ原遺跡のある場所も、東部九州から玖珠を通り日田に抜け、北部九州に通じる旧街道沿いの丘の上で、こうした状況と深くかかわるものと考えられます。

しかし、昨今の交通事情の変化に伴い、道路の改良事業が相次いでいる中で、多くの遺跡が調査の対象となっております。ここに報告します瀧ノ原遺跡もこうした事情で調査されたものであります。本書が、地域の歴史を学ぶ上で、また学術・研究に役立つことが出来れば幸いです。

最後になりましたが、調査中に、御協力いただきました玖珠町教育委員会、地元の方々、及び関係者の皆様に対し衷心より、お礼申しあげます。

大分県教育委員会

教育長 田 中 恒 治

例 言

1. 本書は、大分県玖珠郡玖珠町戸畑字瀧ノ原に所在する瀧ノ原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、国道210号道路改良工事に伴い、建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託により大分県教育委員会が実施した。
3. 現地調査は平成9年10月13日に開始し、平成9年11月28日に終了した。
4. 現地調査は大分県教育委員会文化課の坂本高弘があたり、児玉美香・衛藤麻衣の協力を得た。
5. 現地での写真撮影・遺構実測は調査員が分担して行なった。
6. 出土遺物の実測・実測図の製図は児玉・衛藤が分担した。
7. 出土人骨の分析にあたっては、田中良之教授(九州大学)の協力を得た。
8. 赤色顔料の分析にあたっては、本田光子助教授(別府大学)の協力を得た。
9. 本書の刊行にあたって、原稿執筆はⅠ・Ⅴを坂本、Ⅱ-1を衛藤、Ⅱ-2を児玉が担当し、編集は3名が協議して行なった。

目次

I. はじめに	
1. 瀧ノ原遺跡の立地と環境	
(1) 玖珠盆地と瀧ノ原遺跡周辺の地形	1
(2) 玖珠町の考古学調査とその成果	2
2. 調査の経過	
(1) 調査に至る経緯	2
(2) 調査の経過	3
(3) 調査体制	3
II. 調査の成果	
1. 石棺	4
2. 瀧ノ原古墳	
(1) 墳丘	5
(2) 主体部	6
(3) 出土遺物	8
III. 瀧ノ原遺跡の石棺出土の人骨について	10
IV. 瀧ノ原遺跡の石棺出土の赤色顔料	12
V. まとめ	13

挿図目次

I	
第1図 瀧ノ原遺跡周辺の地形と遺跡	1
II	
第2図 瀧ノ原遺跡の石棺実測図	4
第3図 瀧ノ原遺跡の地形実測図	5
第4図 瀧ノ原古墳の墳丘と土層実測図	6
第5図 瀧ノ原古墳の盛土除去状態と石棺位置図	7
第6図 瀧ノ原古墳主体部実測図	8
第7図 瀧ノ原古墳主体部出土鉄器実測図	9
第8図 瀧ノ原古墳墳丘出土土器実測図	9

図版目次

図版 i	瀬ノ原遺跡石棺出土人骨	11
図版 1	瀬ノ原遺跡と古墳主体部	15
図版 2	瀬ノ原古墳の現況	16
図版 3	瀬ノ原遺跡の石棺 (1)	17
図版 4	瀬ノ原遺跡の石棺 (2)	18
図版 5	瀬ノ原古墳の調査状況 (1)	19
図版 6	瀬ノ原古墳の調査状況 (2)	20
図版 7	瀬ノ原古墳の調査状況 (3)	21
図版 8	瀬ノ原古墳の調査状況 (4)	22
図版 9	瀬ノ原古墳の調査状況 (5)	23
図版 10	瀬ノ原古墳出土遺物	24

I. はじめに

1. 瀬ノ原遺跡の立地と環境

(1) 玖珠盆地と瀬ノ原遺跡周辺の地形

瀬ノ原遺跡のある玖珠町は、九重連山を中心とする九州山地に源を発し、有明海に注ぐ筑後川の上流域に位置する。この川は、玖珠町では玖珠川と呼ばれており、町内の中央部を東から西に貫流し、川沿いに標高320m～350mの盆地状の平野部を形成し水田地帯となっている。

この盆地状の平野部の北側には、標高400m前後の名草台・四日市台地・旦ノ原台地と呼ばれる台地群と、それを間折した谷底平野で構成した地形が展開している。また、南側にも陣ヶ台と呼ばれ、同様な台地がある。このような盆地と台地が織りなす地形の周辺は、北側には標高700m前後の小岩瀬山や大岩瀬山があり、南側にも伐株山や標高1140mの万年山が連なっている。こうした山々は、メーサやビュートと呼ばれ、山頂がテーブル状に平坦になっている独特の景観をつくりだしている。

さらに、玖珠町の北部は、名勝耶馬溪の景勝地として知られており、紅葉の季節には観光客で賑わっている。そして、町の南部には大原野と呼ばれる標高850m前後の高原地帯が広がっている。

こうした中で、玖珠盆地は、西端で南から延びる陣ヶ台台地と北から延びる山塊により挟まり、閉じている。玖珠川はこの部分で蛇行し、再び東から西へ流れ、周辺に平地を形成している。この川は約3km直流し再び蛇行する。この部分には、「日月の滝」と呼ばれる落差約7mの滝が形成されている。瀬ノ原遺跡は、この滝を東南方向に見下ろす場所にあり、玖珠川の北側にある山塊から延びる尾根の先端部にあたる。標高は約350mで、周辺からの比高差は40m前後である。瀬ノ原遺跡から見れば、東・南・西側に広がる水田地帯を見下ろす場所であり、南に万年山の山塊がせまっている。

遺跡のある尾根は、東側が、江戸時代に龍神社を建設した際に削平されており、北側は、国道10号線とJR久大本線により、分断されている。



1. 瀬ノ原遺跡
2. 角道橋跡
3. 角道遺跡
4. 木山遺跡
5. 原田遺跡
6. 坂東橋穴墓
7. 岩塚古墳
8. 納屋山古墳
9. 白石北遺跡
10. 飯原遺跡
11. 西田遺跡
12. 清田庵A遺跡
13. 清田庵B遺跡
14. 清田庵C遺跡
15. 中西遺跡
16. 電塚古墳
17. 妙大寺A遺跡
18. 妙大寺B遺跡
19. 待家塚古墳
20. 陣ヶ台稲塚古墳
21. 陣ヶ台遺跡
22. 伐株山神社
23. 大野中遺跡
24. 小牟遺跡
25. 中山田遺跡
26. 野田城跡
27. 野田山遺跡
28. 谷ノ溝遺跡
29. 野田古墳
30. 白密遺跡
31. 白田布遺跡
32. 池ノ原B遺跡
33. 下橋稲塚古墳
34. 下線石塔遺跡
35. 池ノ原遺跡
36. 古橋城跡
37. 戸原遺跡

第1図 瀬ノ原遺跡周辺の地形と遺跡

②玖珠町の考古学調査とその成果

玖珠盆地は古くから古墳や遺跡の存在が知られている。これらに対する調査も、1900年代の前半から主として古墳について行なわれ、その報告もなされている。しかし、本格的な考古学調査が始まるのは1900年代後半からである。

玖珠町で最初に実施された、本格的な発掘調査は、1951年と1953年に実施された名草台遺跡である。この遺跡は、玖珠盆地の北側の台地上にあり、群集化した石棺と石槨を主体部とする円墳が明らかにされた。この調査では後漢鏡の破片も出土しており、注目された。

この調査以後は、発掘調査もされることはなかった。しかし、1970年代からは、玖珠盆地の南側山麓沿いの水田地帯に対する圃場整備事業が開始された。これに伴い1976年に町東部の玖珠川段丘上にある、おごもり遺跡が調査された。その結果、弥生時代から古墳時代にかけての集落と、箱式石棺を主体部とする方形周溝墓を検出した。方形周溝墓の調査は県内初めてであり、注目された。しかし、圃場整備事業に伴う発掘調査は、それ以後しばらく中断していた。

また、1981年から1983年にかけては、玖珠町のシンボリックな存在である、伐株山の山頂にある伐株城の調査が行なわれた。この城は、南北朝期には北朝方の九州の拠点のひとつとして著名であり、戦国期には、薩摩の島津軍が豊後に侵入した際の激戦地としても知られていた。発掘調査は山頂に連続する方形の土塁を中心に行なわれ掘立柱による建物遺構や、16世紀の遺物が多数出土した。また、斜面部には堅堀が存在することも明らかにされた。

1984年以降、再び圃場整備事業に伴う発掘調査が本格化してゆく。まず、1984年に、盆地の中央にあたる小牟遺跡で、古墳時代の石棺と近世の掘立柱による住宅遺構を調査した。そして1985年と1986年には瀬ノ原遺跡とは玖珠川を挟んで対岸にあたる小田地区の西田遺跡・冷酒庵A遺跡・冷酒庵B遺跡・冷酒庵C遺跡・中内遺跡・妙大寺A遺跡・妙大寺B遺跡・板屋遺跡を圃場整備事業に伴い実施した。これらの遺跡からは縄文時代から中世に至る遺物が出土し、弥生時代・古墳時代・占代の竪穴住居や掘立柱建物等の、遺構が検出された。

1990年代になると、玖珠盆地の北側を通る九州横断高速道の建設が本格化し、それに伴い多くの遺跡が調査された。調査は1990年代から1993年にかけて実施され、原田遺跡・岩塚古墳・谷ノ瀬遺跡・下綾垣遺跡・上ノ原横穴墓群・瀬戸古墳群・瀬戸遺跡・地別当遺跡・白岩遺跡が発掘された。またこの時期、各種開発も盛んになり、道路建設に伴い崖横穴墓群も調査された。その結果、白岩遺跡では、環濠を伴う高地性集落が確認された。また原田遺跡・岩塚古墳・上ノ原横穴墓群・瀬戸古墳群等では、古墳時代を中心に集落や墳墓が明らかにされた。近年では、玖珠盆地の北部に位置する、中世山城である角牟礼城の発掘調査を1993年から実施しており、16世紀後半の石垣を築く初期の城として、注目されている。そして1997年には白岩遺跡と玖珠川を挟んで南に対峙する陣ヶ台遺跡で、同時期の環濠集落を調査している。

2. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

玖珠盆地の中央を通る国道210号線は、九州の東海岸の都市である大分市と西部の都市である久留米市を結ぶ幹線道路として、建設されている。大分県内でのこのルートは、古くは太平府に通じる幹線であり、奈良時代には駅伝制の駅が、高坂駅(大分市)・由布駅(湯布院町)・荒田駅(玖珠町)・石井駅(日田市)と設置されていた。すなわち、この道路は、古来より九州の東と西や北部九州を繋ぐ動脈とも言える。このような、重要路線であるため、古くからその時代状況に応じ、整備・改修されてきている。しかし、近年の交通事情の急激な変化による交通量の増加は、狭小部分や市街地などで交通渋滞の原因となっている。そこで、建設省では、随時、バイパス建設や改良工事を行い、これらの解消に努めている。

瀬ノ原遺跡のある玖珠町北山田地区も、北から延びている尾根状の丘陵を掘削し、狭い範囲に国道210号線とJR久大本線が平行して通っている。しかも交差点と踏み切りが連続する複雑な構造をしている。このため、しばしば交通渋滞を引き起こす要因となっていた。そこで、建設省は、この交差点の拡幅を行い、交通渋滞の解消を行なうこととした。

この工事は、河道210号線の北側に鉄道があるため、両側の丘陵を掘削し広げる方法を取らざるえない状況であった。しかし、南側の丘陵部には、瀧神社があり、掘削工事をそのまま実施すると、瀧神社の境内と道路との間に高さ約10mで、幅の狭い壁状の残地が残ることになった。そこで、瀧神社と建設省が協議の結果、この残地部を地下げし、駐車場とすることになった。ところが、丘陵頂部には塚が存在し、地下げを行うと、削られてしまうことが判明した。そこで、事前に発掘調査を行なうこととなった。

(2) 調査の経過

発掘調査は、平成8年に試掘調査、平成9年に本調査の順で実施した。

平成8年の試掘調査は、塚の形態、時期、規模などの確認を目的とした。塚は全体に渡り、笹や草が繁茂しており、頂部や西北の裾部には、平成3年の台風19号による直径約50cmの杉の風倒木により大きなくぼみができていた。また、頂部には宝篋印塔の露盤が据えられていた。塚は表面観察によると、一辺9mの方形をしており、方墳状をしている。

試掘調査は、塚の南側を、頂部から裾部にかけて、幅1m、長さ7mの調査区を設定し、掘り下げを行なった。その結果、塚の頂部は上砂を積み上げられていたが、斜面から裾部にかけては、柔らかい砂状の凝灰岩を削り出し形を築えている。また、裾部は尾根状の丘陵を断切るように浅い溝も観察された。しかし、時期を特定できる遺物については全く出土しなかった。

以上のように、平成8年の試掘調査では塚の形態や規模、溝の存在などは確認されたが、時期については確証を得ることは出来なかった。しかし、頂部に残されていた宝篋印塔の露盤や、日田市に類似する中世の塚があることなどから、古墳の可能性を残しながら、中世の塚と考えることが妥当と判断した。

平成9年の調査は、5月から開始をする予定であったが、調査対象地が保安林の指定を受けていることが、判明した。このため、内部で作業を行う場合の許可申請を行なう手続きが必要となった。そこで、5月には、塚の現状の測量調査を実施し、許可が下りのを待った。許可が下りたのは、6月末であったが、約2ヵ月間を要する調査期間中に、瀧神社の夏の大祭と、秋の大祭がかかることに配慮し、これらが終了後の11・12月に実施することとした。しかし、地元の要望もあり、結局調査は10・11月の2ヵ月間で実施した。

調査は、塚の排上遺場を確保することと、周辺の遺構の有無を確認することを含めて、塚の北側の平坦部に2ヵ所、4m×4mの試掘区を設定して掘り下げを行なった。その結果、一段低い調査区では遺構は確認されなかったが、塚に近い調査区の北端から、石棺が1基検出された。また、塚については、試掘の溝を利用し、十字に幅1mの調査区を設定し、埋葬施設の有無や盛り土の状況などの確認をおこなった。そして、最終的には、塚の地山以外の上砂を除去した。その結果、頂部の東寄りでも、赤色顔料と粘土塊が散布し、鉄器が出土する埋葬施設を確認した。さらに、塚の南側斜面で、鉢形土器と小形丸底甕2点が出土したため、この塚は方墳であることが明らかになった。

こうして、塚が古墳であることが確認され、石棺も1基検出されたため、遺跡名を瀧ノ原遺跡とし、古墳は瀧ノ原古墳と名付けた。

調査終了後、調査区は、保安林内の作業条件どおり、埋め戻しを行い、調査以前の状態に復旧した。

(3) 調査体制

平成9年度に本調査を実施した瀧ノ原遺跡の調査の体制は、以下の通りである。なお役職名は調査当時のものである。

調査主体 大分県教育委員会

調査統括 後藤 一郎(大分県教育庁文化課長)

調査担当 高橋 徹(大分県教育庁文化課副主幹 平成8年度の事前調査担当)

坂本嘉弘(大分県教育庁文化課副主幹)

甲斐 猛(大分県教育庁文化課主査)

児玉美香(大分県教育庁文化課嘱託)

衛藤麻衣(大分県教育庁文化課嘱託)

II. 調査の成果

1. 石棺

石棺は、瀬ノ原古墳の東北、墳墓から約3m離れた表土層直下で検出された。周辺には両溝などは確認されず、石棺のみが築造されたと考えられる。なお、墳丘の一边及び主体部と本石棺は、ほぼ平行に構成されている。

石棺の構造は、蓋石が5枚の板石を使用し、被葬者の頭部から側に「鉤重ね」で並べられている。隙間やつなぎ部分を埋める目貼りは確認されなかった。主体部は扁平な安山岩の板石を両側に4枚、小口に1枚づつ計10枚を組み合わせており、主軸方位はN-35°-Wを指向している。棺内の床面には扁平な大小約10枚の板石を不規則に敷きつめている。石棺の規模は、内のりで長さが187cm、頭位側の小口の幅が42cm、足側の小口の幅が22cmで、深さ21cmを測る。石棺の築造順位は、長さ225cm、頭位側の幅102cm、足位側の幅84cm、深さ25cmの上墳を掘削し、頭位と足位の両小口板石を埋め、その後両側に板石を立てている。そして、床面に小さな板石を敷きつめ、石棺内部に赤色顔料を塗布し、遺体を安置している。最後に石蓋をかぶせるわけであるが、その前に石蓋内面にも赤色顔料を塗布している。その際、両側と小口の板石上面を打ち欠き、平坦になるよう微調整したと考えられ、石棺蓋と同じレベルに赤色顔料の塗布された石棺材の細片が散っている。

石棺内からは人骨の頭部と下肢骨の一部が出土したのみで、副葬品などは検出されなかった。

石棺の時期は、出土遺物がないため、確定が困難である。しかし、大分では、両小口と両側に板石で囲う石棺の出現は古墳時代からである²¹⁾。また、4・5世紀の玖珠盆地の石棺の構造は、蓋石が、1～3枚、側石も1～2枚で、床面まで深い²²⁾。そこで、瀬ノ原遺跡の石棺を見ると、蓋石は鉤重ねで、弥生時代の石蓋土壇墓²³⁾の伝統を継承している。このことから、本石棺は瀬ノ原古墳とほぼ同時期の3世紀後半から4世紀初頭と考える。

注

(1) 清水宗昭・高橋 徹

「大分の石棺」

九州考古学第56号

九州考古学会 1983年

(2) 渋谷忠幸・牧尾義則

「おごもり遺跡調査概報」

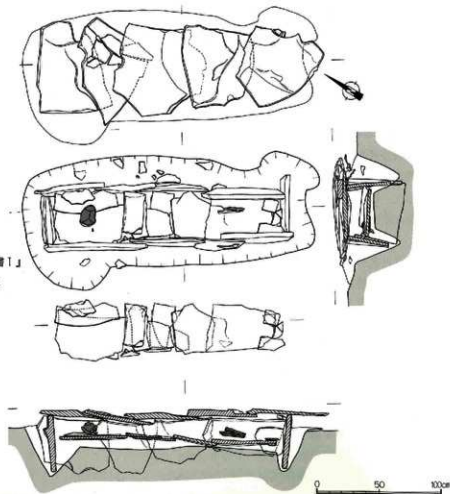
玖珠町教育委員会 1977年

(3) 小倉正五・佐藤良二郎

「原館川流域遺跡群発掘調査報告書Ⅰ」

宇佐市文化財調査報告書 第2集

宇佐市教育委員会 1986年

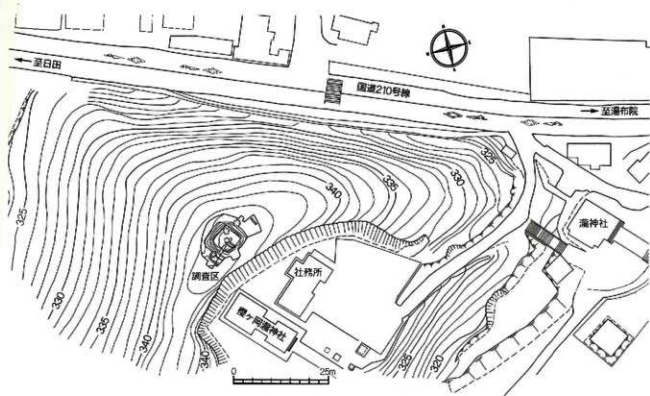


第2図 瀬ノ原遺跡の石棺実測図

2. 瀬ノ原古墳

(1) 墳丘

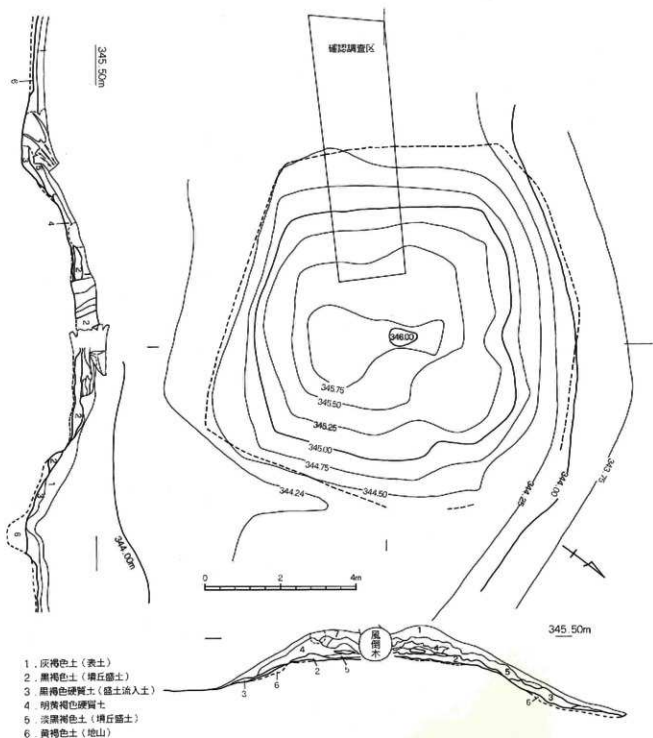
墳丘は、墳丘測量と土層観察の結果から方墳と判断した。自然丘陵の頂部を整形したもので、上部1辺約5.6m、基底部1辺約9.2mの方形を呈していると思われるが、南東部は神社建設のために削平されていた。墳丘の比高は約2.8mで、砂質凝灰土の地山の上に厚さ約16cmの黒褐色の盛土層を確認した。南東部の墳丘端部を切るように直径約1.6m、深さ約0.2mの土坑があった。また、南西部の裾部と平行して上面幅約1.4m、深さ約0.2mの溝が約1.8mにわたって観察されたが、他の部分では溝は確認できなかった。墳丘造営に必要な土量をこれらの土坑と溝から確保したと思われる。墳丘の西側斜面の勾配が急になるあたりの地山直上で土器2点が出上した。土坑と溝からの遺物はなかった。墳頂部のほか、裾部の一部も風倒木によって攪乱されていた。



第3図 瀬ノ原遺跡の地形実測図 (1/1000)

(2) 主体部

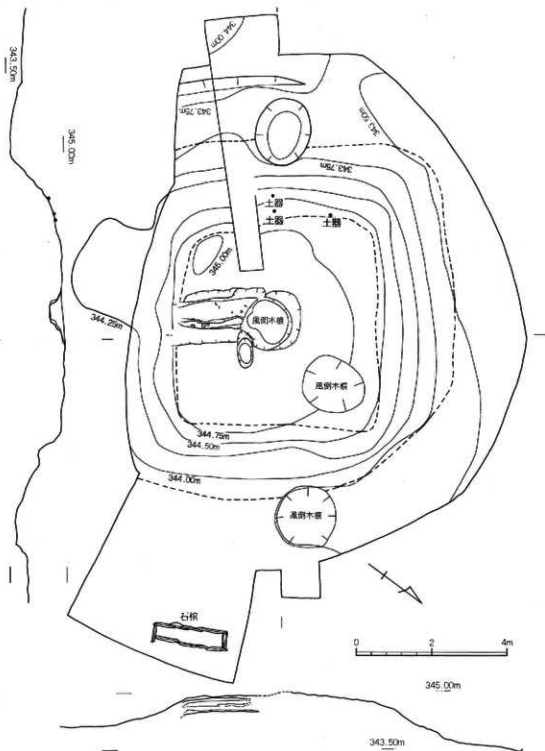
主体部は中心からやや南よりに設けられた上築帯で、主軸は $N-15^{\circ}-W$ を測る。基壇は二段掘りの隅丸長方形を呈し、北西部の小口部付近ではU字型断面であった。床面に石材の抜き取り跡などは無かった。検出面で長辺2.2m、短辺1.0m、深さ0.35mを測るが、北側は風倒木によって攪乱を受け、南側は裾部に向かうにつれて消滅している。埋土は三層に分かれ、上層は細かい黒褐色土、中層は軽石を含む黄褐色土、下層は砂質のにぶい褐色土である。北西部で



第4図 瀬ノ原古墳の墳丘と土層実測図

は小口部付近にわずかに赤色顔料を残すのみだったが、南東部では床面全面と側面の一部に人糞の赤色顔料が塗布されていた。また、南東部の東側壁と床面には拳人の淡黄色粘土が散在していた。北西部の床面直上と中央部床上20cmで計5点の鉄器が出土したが、錯落しとX線撮影の結果、鈍2点と鉄剣1点に接合できた。人骨等は出土しなかった。

以上のことから、主体部は七塘墓と考えられるが、木棺墓の可能性も完全には捨てきれない。頭位は赤色顔料の多い南東と推定される。遺物が散乱して出土したことから、風倒木による攪乱で土層が確認できなかった墳頂部付近から盗掘されたと考えられる。



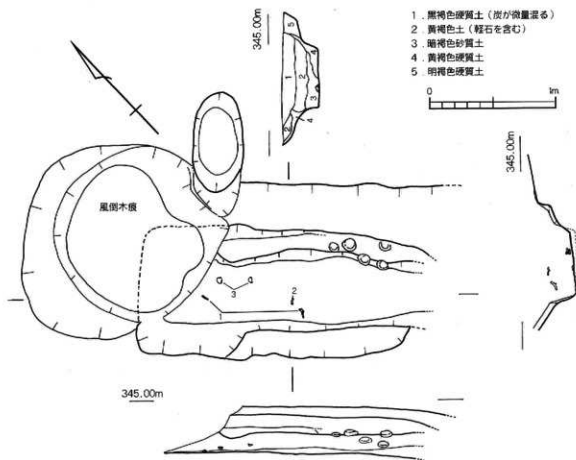
第5図 瀬ノ原古墳の盛土除去状態と石棺位置図

(3) 出土遺物

墳丘から土器2点、主体部から鉄器3点が出土した。

(土器) 墳丘の墳頂部西側端の床土直上からはほぼ完形に近い椀1点、約60cm下の胴部途中で小形丸底壺が出土した。出土状況から見て小形丸底壺は墳頂部付近から転落したものと思われる。椀は口径18cm、器高7.4cmを測り、底部は丸底で口縁部がやや内傾する。器面調整は、外面は右から左方向へのヨコハケのち荒いナデ、内面は不規則なナメハケのち上部にやや丁寧なヨコナデ。外面上部の一部に赤色顔料を塗布する。小形丸底壺は、口径12.0cm、器高8.1cmを測る。口縁部は直線的に上方へ伸びる。胴部は偏球形に近く、底部は丸底である。調整は、外面はナメハケの後ヨコ方向のミガキを施したと思われる。内面は口縁部にナメハケのちナデ、胴部と底部は丁寧なナデ。外面内面ともにわずかだが赤色顔料が残っている。胎土は、1mm以下の角閃石粒、斜長石粒を含み、これは椀と共通している。

出土土器の時期について検討する。玖珠盆地における古墳時代の土器編年作業は進んでいるとはいえないが、当遺跡の土器と同時代のものと思われる資料が出土しているのは、おごもり遺跡⁽¹⁾、中西遺跡⁽²⁾、陣ヶ台遺跡⁽³⁾、天瀬町の宇上遺跡が挙げられる。椀は、中西遺跡、おごもり遺跡から多数出土している。中西遺跡3号住居跡№5、14号住居跡№9は、器形・調整共に類似している。一括投棄されたセットが揃う同遺跡2号住居跡、5号住居跡の資料にも同類の椀が含まれており、これらは古墳時代初頭のものとして位置付けられている。おごもり遺跡出土の、第Ⅰ区1号住居跡の丹塗椀形土器、第Ⅱ区2号住居跡№11はいずれも外面の仕上げが比較的丁寧なもので、弥生時代終末期から古墳時代初頭に遡られている。当遺跡出土の椀は、かなり大形であること、内面外面の調整が丁寧なことなどの違いはあるが、古墳時代初頭を前後する時期に推定できる。小形丸底壺については、おごもり遺跡第Ⅰ区5号住居跡出土のものが器形調整ともに類似している。第Ⅱ区2号住居跡からは、椀と小形丸底壺がセットで出土している。



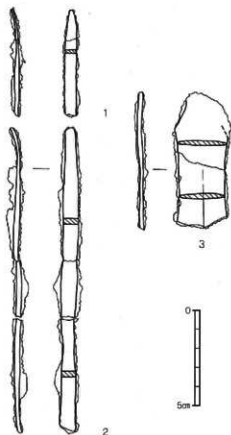
第6図 瀬ノ原古墳主体部実測図 (1/30)

宇上遺跡⁽⁴⁾11、19号住居跡出土のものは弥生後期末から古墳初頭に比定されている。また、陣ヶ台遺跡からも多数出土しており、古墳時代前期に位置づけられるようである。このようなことから、当遺跡出土の小形丸底壺は古墳時代初頭から前期前半頃のものとする。

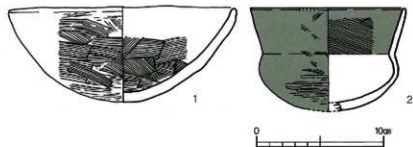
(鉄器) 鉄器は5箇所から散乱して出土した。北西部床面直上からの2点は鉄剣1点に接合できた。断面は中心部約3mmの両刃で、X線撮影で錆のような線も観察されたことから鉄剣の先端部と判断した。長さ7cm、幅約2.5cmを測る。北西部の1点と中央部床上20cmの2点は銚2点に接合できた。2点とも身部は板状で、反りのある刃部までその幅(6~8mm)がほぼ同じタイプである。1は横断面が長方形を呈し裏すきは無い。2は身部の横断面は長方形、刃部は三日月状を呈し裏すきを持つ。1、2とも錆の有無は確認できなかった。類似のものは竹田市小園遺跡⁽⁵⁾などから出土しており、弥生後期末から古墳初頭に比定されている。

以上、墳丘と主体部、出土遺物の年代について検討した。これらを併せ考えると、瀬ノ原古墳は古墳時代初頭を中心とした時期に造築されたと推定され、玖珠盆地では今までのところ最も古い方墳であることが明らかになった。

- (1) 渋谷忠章・牧尾義則「おごもり遺跡調査概報」
玖珠町教育委員会 1977年
- (2) 清水宗昭ほか「小田遺跡群」玖珠町教育委員会 1987年
- (3) 坂本嘉弘「陣ヶ台遺跡」玖珠町教育委員会 1999年刊行予定
- (4) 高橋信武・小林昭彦「宇上遺跡発掘調査報告書」
天瀬町教育委員会 1986年
- (5) 坂本義弘「菅生台地の遺跡・X」竹田市教育委員会 1985年



第7図 瀬ノ原古墳主体部出土鉄器実測図



第8図 瀬ノ原古墳墳丘出土土器実測図

Ⅲ. 瀧ノ原遺跡の石棺出土の人骨について

九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座

舟橋京子・田中良之

大分県玖珠町瀧ノ原遺跡の石棺調査において1体の人骨が出土した。人骨は大分県教育委員会の発掘調査の際に取り上げられ、その後同教委から九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座へと人骨調査の依頼があった。九州大学へと人骨を搬入したのち、本講座において整理・分析を行った。以下にその結果を報告する。

なお、人骨は現在九州大学大学院比較社会文化研究科考古人類資料室に保管されている。

1. 保存状態

人骨の保存状態は不良である。頭骨は鼻根部から眼眶下縁にかけての上顎骨片が残っており、前頭骨・頭頂骨・後頭骨はそれぞれ冠状縫合・ラムダ縫合付近の一部が残存するのみである。後頭骨外後頭隆起の発達は強い。頭蓋縫合は、残存している主要三縫合のうち、冠状縫合およびラムダ縫合は内板が閉鎖しており、外板もほぼ閉鎖している。矢状縫合は内・外板ともに閉鎖している。

歯牙は下顎右第2大臼歯のみが残存しており、歯牙の咬耗度は橋原の2b度である(橋原, 1957)。

上肢及び頰骨片は残存していない。下肢は左右脛骨骨体の近位三分の二程度が残存しており、左右ともにヒラメ筋線の発達は強い。

2. 性判定

後頭骨の外後頭隆起の発達が高いこと、脛骨のヒラメ筋線の発達が高いことから、本人骨は男性である可能性が高いと判定される。

3. 年齢推定

頭蓋主縫合は観察しうる限り、内板は完全に閉鎖しており、外板も閉鎖あるいはほぼ閉鎖している。また、残存歯牙の咬耗度は橋原の2b度である。もちろん、残存歯牙が1本のみである場合、対咬歯牙も残存していないことから、この咬耗度が生前の咬耗度を示すものであると断定することはできない。しかし、頭蓋主縫合の癒合程度と歯牙咬耗度所見をあわせて考えると、本人骨に対しては熟年以上の年齢が推定されよう。

4. おわりに

以上のように、瀧ノ原遺跡の石棺出土人骨は、保存状態が悪く、遺存していた部位はわずかであった。しかし、幸いにも年齢・性別を知るうえで有効な部位が遺存していたため、本石棺の被葬者は熟年以上に達した男性であった可能性が高いという結果が得られた。

参考文献

橋原博 1957「日本人歯牙咬耗に関する研究」『熊本医学会雑誌』31補冊4



頭蓋骨



脛骨

IV. 滝ノ原遺跡の石棺出土の赤色顔料

本田 光子 (別府大学)

大分県玖珠町の滝ノ原遺跡より出土した赤色物について、その材質と状態を知るために顕微鏡観察および蛍光X線分析を行った。赤色物の出土例に関する今までの知見に寄れば、出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄：赤鉄鉱 (Hematite) を主成分とするベンガラと、硫化水銀 (赤)：辰砂 (Cinnabar) を主成分とする朱の2種が用いられている。これら以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが出土例はまだ確認されていない。ここではこれら3種類の赤色顔料を考えて分析を行った。

試料

依頼を受けた資料は、滝ノ原遺跡石棺内面に塗られていた赤色部分と床面の赤色物である。これらをまず実体顕微鏡下で観察し、赤色顔料の有無と状態を観察し、試料の調整を行った。石棺内面の赤色部分については棺材小破片の提供を受けた。そのまま実体顕微鏡観察をしたところ、ベンガラと思われる赤色物が石材表面の凹部に溜まった状態が観察された。棺内の赤色部分は土砂にベンガラと思われる赤色物が混じり込んだ状態で、赤色物だけが凝集している部分は僅かである。両者とも赤色物だけの部分から針先につく程度の試料を採取し、検鏡試料とした。石材についてはそのまま、蛍光X線分析の測定を行った。床面から採取の赤色物については赤色物の集合している小塊を集め研和して試料とした。

顕微鏡観察

光学顕微鏡 (透過光・落射光 40～400倍) で観察した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類・粒度等を観察するものである。三者は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等に認められる特徴の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。両試料にはベンガラの特徵 (質感・透明度等) を持つ赤色顔料粒子が認められ、朱粒子は認められなかった。また、ベンガラの原料を推定できる管状の粒子は含まれていなかった。

蛍光X線分析

赤色物の主成分元素の検出を目的として実施した。別府大学設置の堀場製作所製エネルギー分散型蛍光X線分析装置 MESA500 を用い、15Kv・114 μ A、50秒、50Kv・16 μ A、で測定を行った。赤色顔料の主成分元素としては朱であれば水銀、ベンガラであれば鉄である。両試料には赤色顔料の主成分元素としては鉄が検出された。両試料とも鉛丹の主成分元素である鉛は検出されなかった。他にケイ素、マンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどが検出されるが、それらは主として混入の土砂に由来すると考えられる。ただし、鉄は土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断する。

まとめ

以上の結果、両試料は粒子の形状および定性分析で鉄が含まれ水銀が確認されないことから、赤色顔料ベンガラであると判断した。ベンガラには管状のいわゆるパイプ状粒子は含まれていない。

古墳時代の墳墓では、一般に埋葬施設ではベンガラ、遺骸の頭腹部分では朱といういわゆる「朱とベンガラの使い分け」が認められるが、本例では床面より朱の検出が認められなかった。

調査の機会を戴いた玖珠町教育委員会、大分県教育委員会、同坂本嘉弘氏に感謝いたします。

V. まとめ

玖珠盆地とその周辺では、これまで多くの古墳が確認されている。特に6世紀代には装飾古墳である鬼塚古墳と鬼ヶ城古墳、玖珠盆地唯一の前方後円墳である危都起古墳が、地域的にそれぞれ離れて築造されており、これを中心に三つの地域集団が存在したことが想定されている⁽¹⁾。

ところが、近年の高速道路建設や開場整備事業などの開発事業に伴う発掘調査で、6世紀以前の古墳時代についても資料が、集まりつつある。それによると、玖珠盆地は地形的な条件と照らし合わせ、玖珠盆地東部・玖珠盆地中央部・森川流域・太田川流域・太田川上流域・玖珠盆地西部の6つの小地域が考えられる。玖珠盆地東部のおごもり遺跡⁽²⁾では、鉄器を豊富に持つ5世紀代の方形周溝墓があり、森川流域の名草台遺跡⁽³⁾では3～4世紀代と考えられる石棺群や石棺を主体部とする円墳の千人塚古墳や、5世紀代の竪穴式石室を主体部とする円墳の瀬戸古墳と周辺の石棺群などが明らかにされている⁽⁴⁾。また玖珠盆地中央には、3～4世紀代の石棺群の小平遺跡⁽⁵⁾、4世紀代の方形周溝墓のある陣ヶ台遺跡⁽⁶⁾などが調査されている。

このように墓制から見ると、6世紀以前の玖珠盆地とその周辺は、方形周溝墓・石棺・竪穴式石室や石棺を主体部とする円墳などが、地域的なまとまりを見せながら存在する。こうした中で、本書の瀬ノ原遺跡は玖珠盆地西部で小地域を構成する遺跡のひとつである。(第1図参照)

瀬ノ原遺跡周辺の地形は、玖珠盆地の中央を流れる玖珠川に、北側から裏河内川が流れ込み、これらの川が谷底平野を形成している。弥生時代に始まる本格的な稲作は、最初こうした谷部の低湿地で水田開発が行なわれたと考えられている。瀬ノ原遺跡の北東約1kmに位置する原田遺跡⁽⁷⁾からは、弥生時代初期の帯形土器が出土しており、稲作の情報はすでに、玖珠盆地には届いていた可能性が高い。

こうした、生産地を背景に、この地域の6世紀以前の遺跡としては、瀬ノ原遺跡・傾城山古墳・岩塚古墳が知られている。瀬ノ原遺跡では3世紀末から4世紀初頭の方墳である瀬ノ原古墳、ほぼ同時期と考えられる石棺が明らかにされた。また、岩塚古墳⁽⁸⁾は玖珠盆地の西端部を南に見下ろす位置で、複数埋葬された石棺の主体部のみが検出された。さらに、盆地の平野部に立地する傾城山古墳は、主体部の石棺が覗いている。この2基の古墳は、主体部の状況から4～5世紀代と想定される。その他、瀬ノ原遺跡の北西部に位置する北山田小学校の校庭からは、石棺が多数検出されたと伝えられている。

以上のように、この地域の4・5世紀の墓制には、石棺群と方墳や円墳などの古墳が存在する。こうした同時期の墓制の格差を、社会体制の反映と見れば、群集化した石棺墓は、「ムラ」の構成員の墓地と理解でき、それを見下ろす位置に築かれた瀬ノ原古墳や赤色顔料を塗られた石棺は、この地域の有力者の墓地と言える。こうした状況は先に述べた玖珠盆地中央部の石棺群・方形周溝墓群・円墳や、森川流域の石棺群・円墳の配置と同じである。

このように、瀬ノ原遺跡の方墳や石棺は、玖珠盆地西部の小地域の3世紀末から4世紀はじめの有力者の墓地と理解できる。その後、この地域の有力者の墓地は傾城山古墳に、そして6世紀には玖珠川の対岸に築かれる装飾のある鬼塚古墳へと引き継がれる。この6世紀代の有力者を支えた「ムラ」としては、鬼塚古墳周辺の小田地区で調査された中西遺跡・西田遺跡・板屋遺跡⁽⁹⁾、戸田地区の原田遺跡⁽⁷⁾などが考えられる。またJR北山田駅の東にある駅東横穴墓群は、こうした「ムラ」の構成員が埋葬された墓地のひとつと想定される。

注 (1) 真野和夫「古墳時代」「大分の歴史ふるさと誕生」大分合同新聞社 1976年

(2) 浜谷志華・牧尾義則「おごもり遺跡調査概報」玖珠町教育委員会 1977年

(3) 賀川光夫「九州の黎明と東アジア」賀川光夫古稀記念著作集 1996年

(4) 西哲弘ほか編「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報 日田～玖珠間「第3集」」大分県教育委員会 1993年

(5) 小柳和宏「小平遺跡」玖珠町教育委員会 1985年

(6) 坂本嘉弘「陣ヶ台遺跡」玖珠町教育委員会 1999年刊行予定

(7) 村上久和ほか「堂園遺跡・原田遺跡・岩塚遺跡・玖珠SA地区遺跡群・谷ノ瀬遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(4)大分県教育委員会 1995年

(8) 注7に同じ

(9) 清水宗昭ほか「小田遺跡群Ⅰ」玖珠町教育委員会 1988年

宮内克己「小田遺跡群Ⅱ」玖珠町教育委員会 1988年



瀬ノ原遺跡遠景（東から）



瀬ノ原古墳主体部



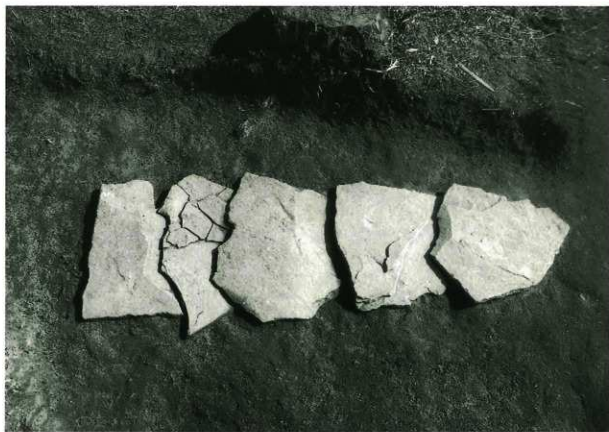
瀬ノ原古墳(1)



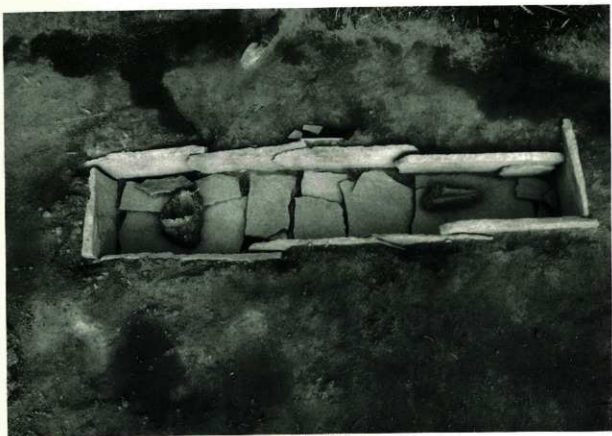
瀬ノ原古墳(2)



検出状況



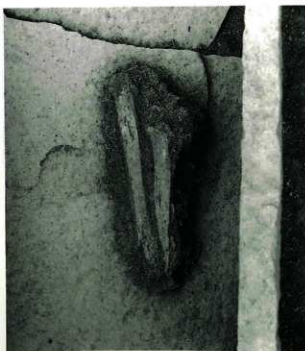
蓋石の状態



石棺内の状況



頭骨出土状態



肋骨出土状態



盛土状況 (1)



盛土状況 (2)



盛土状況(3)



試掘区と盛土状況



主体部検出状況



主体部内の土層

図版 8
瀧ノ原古墳調査状況(4)



主体部調査状況(1)



主体部調査状況(2)



遺物出土状態



完掘状況



墳丘出土土器 (1/3)



主体部出土鉄器 (1/2)

報告書抄録

ふりがな	たきのはるいせき
書名	瀧ノ原遺跡
副書名	一般国道210号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編著者名	坂本嘉弘・児玉美香・衛藤麻衣
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-8503 大分県大分市府内町3丁目10番1号 電話097-536-1111
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たきのはる 瀧ノ原遺跡	くすくす 玖珠郡玖珠町 とほだ たきのはる 戸畑字瀧ノ原	44462		33度 16分 40秒	131度 5分 54秒	1998年 10月13日 ∧ 11月28日	110㎡	道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瀧ノ原遺跡	墓地	古墳時代前期	石棺 方墳	人骨の一部 土器 鉄器	

瀧ノ原遺跡

一般国道210号道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999年3月31日

大分県教育委員会

〒870-8503 大分市府内町3丁目10番1号
☎097-536-1111

印刷 別府印刷株式会社

(〒874-0919 別府市石垣東10丁目8-4)
TEL0977-21-1818 FAX0977-21-1819

